

数学科学習指導案

日 時 平成 26 年 10 月 7 日(火) 5 校時
場 所 1 年 A 組 教室
学 級 1 年 A 組(男子 19 名 女子 15 名 計 34 名)
授業者 及川 晃弘(T1) 石川 具昭(T2)

1 単元名 第 4 章 比例と反比例 (東京書籍「新しい数学 1」)

2 単元について

(1) 生徒について

小学校 6 年時の CRT の結果から、「比例や反比例」の項目の得点率は全国比より若干高い傾向にある。しかし、得点率が 50%未満の生徒の割合も 23.9%(16 人/67 人)とやや多いことから、比例に対して苦手意識を持っている生徒が少なくないことがうかがえる。本学級は、数学の学習に対して意欲的に取り組む生徒が多く、グループでの活動を積極的に授業に取り入れたことにより、数学を不得意としている生徒も解答の確認をする際はもちろん、難しい課題解決の場面などでも他の生徒に容易に聞くことができる学習環境が整ってきた。また 8 月に校内で行われた学習アンケート結果 [表]からも、よい雰囲気の中でグループでの学習が行われ、学習の手助けとなっていることがわかる。

本校は、今年度、小中一貫教育に取り組み 2 年目となる。生徒は、中学校の教員による小学校 6 年時の算数の授業を受けてきたことで、中学校の数学の授業に対する抵抗感が少なく、安心感をもって学習に取り組むことができている。また、小学校の教員が中学校の授業で指導に関わることにより、下位の生徒がさらに安心して授業に臨むことができている。

[表] 学習アンケート結果(一部抜粋)

質問項目	できている どちらかといえばできている
他の生徒や先生の話聞きくことは、自分で考える時の参考になりますか	88%
わからないことがある時、他の生徒や先生にきいていますか	82%
良い雰囲気の中でグループの学習が行われていますか	88%

(2) 教材について

小学校算数科では、第 4 学年から第 6 学年にかけて、数量の関係を□、△、a、x などを用いて式に表し、それらに数をあてはめて調べたり、変化の様子を折れ線グラフで表し変化の特徴を読み取ったり、比例の関係を理解しこれを用いて問題解決したり、反比例の関係について理解したりしてきている。これらをもとに中学校数学科において第 1 学年では、関数関係についての内容を一層豊かにし、具体的な事象の中から伴って変わる二つの数量を取り出して、その変化や対応の仕方に着目し、関数関係の意味を理解できるようにする。これらの関数関係を見だし表現し考察する能力は 3 年間を通して高めていくものである。

比例、反比例の学習は、日常生活において数量を関係的に探究する基礎となるものであり、これらの学習においては、一般的、形式的に流れることなく、具体的に事象を考察することを通して、関数関係を見だし表現し考察する能力を培っていく。また、数の拡張や関数の概念を基にして、小学校算数科で学習した比例、反比例を関数としてとらえ直すことが大切である。

(3) 指導について

本単元における関数の指導では、いろいろな事象の中に潜む関係や法則を数理的にとらえ、数学的に考察し処理できる能力を育てていく。このとき、表、式、グラフが有効であることを相互に関連付けて理解させ、関数の特徴を見いだす能力を培うよう指導していく。また、比例・反比例を用いて実生活と関連した具体的な事象をとらえ説明するために、その事象を式で表現して判断したり、比例・反比例とみなすことによって問題を解決したりすることができるようにする。その際に、判断の根拠や解法を他者に説明することができるよう指導していく。

これらを指導するにあたり、本単元もグループ学習を活用し、方程式への興味・関心を高める手立てとしながら、解き方や考え方について他者に説明や交流を行うことにより、各々の理解をより深化させられるようにしたい。

3 単元の指導目標と指導計画・主な評価規準

(1) 指導目標

- ① 関数の意味を理解することができる。
- ② 比例・反比例の意味を理解することができる。
- ③ 座標の意味を理解することができる。
- ④ 比例・反比例を表、式、グラフなどで表し、それらの特徴を理解することができる。
- ⑤ 比例・反比例を用いて具体的な事象をとらえ説明することができる。

(2) 指導計画・主な評価規準（18時間）

※ 評価の観点について … 主になるところは◎、その他の関連は○で表記する。

時数	主な学習活動	評価の観点				主な評価規準
		関	考	技	知	
1 (本時)	ペットボトルキャップの個数を比例の考えを使って求める	◎				・比例の関係を見だしキャップの個数やワクチンの個数を求めようとしている。
1	関数の意味を理解し、関数の関係を見いだす				◎	・関数や変数の意味を理解し、事象の中にある関数関係のものを理解している。
2	比例の意味を理解し、比例する事象を式に表したり、比例の式を使って具体的な場面を考察する		○	◎		・比例の関係を表や式に表すことができる。 ・事象の変域を求め、不等号を使って表すことができる。
1	平面上の点について座標を用いて表す				◎	・平面上の点の座標を求めたり、2つの数の組を平面上の点で表したりすることができる。
2	$y=ax$ のグラフをかき、グラフの特徴を調べる		○	◎		・比例のグラフをかくことができる。
1	1組の x 、 y の値やグラフから比例の式を求める		○	◎		・1組の x,y の値から比例の式を求めることができる。
1	基本の問題					
2	反比例の意味を理解し、反比例する事象を式に表したり、反比例の式を使って具体的な場面を考察したりしようとする		○	◎		・反比例の関係を表や式に表すことができる。
1	$y=\frac{a}{x}$ のグラフをかき、その特徴を調べる		○	◎		・反比例のグラフをかくことができる。
1	1組の x 、 y の値やグラフから反比例の式を求める		◎	○		・1組の x,y の値やグラフから反比例の式を求めることができる。
1	基本の問題					
1	図形の面積や周について、比例や反比例の関係を調べる	○	◎		○	・ $A \times B = C$ で表される関係について、その中の2つの数量の関係が比例、反比例であるかどうかを判断し、それを説明することができる。
1	比例や反比例の見方や考え方を利用して具体的な場面の問題を解く	○	◎			・2つの数量の関係を比例、反比例とみなして、変化のようすを調べたり、予測したりすることを通して、比例、反比例を利用することのよさを見いだすことができる。
1	グラフを利用して具体的な場面の問題を解く		◎	○		・グラフを利用して問題を解決することを通して、グラフのよさを見いだすことができる。
1	章の問題 A					

理科学習指導案

日 時 平成 26 年 10 月 7 日(火) 5 校時

場 所 第 1 理科室

学 級 2 年 A 組(男子 16 名 女子 17 名 計 33 名)

授業者 千田 裕美

1 単元名 電流の性質 (東京書籍「新しい科学 2 年」)

2 単元について

(1) 生徒について

全体的に実験・観察にまじめに取り組む学級である。しかし、既習事項の理解が曖昧だったり、分析して解釈する力が弱いために自分の考え方に自信をもてない生徒も多い。そのためグループ討議をしても発言力のある生徒の意見に流されてしまう傾向が見られた。また、日常生活における科学的な現象には興味を示すが、それがどのようなしくみによるものなのかということに疑問を持つことは少なく、考えをまとめて表現することにも消極的である。

そこで、授業では、初めに個々で考える時間を保証することにより課題に向き合わせ、さらにグループ内で他のメンバーの考えを聴き合うことにより、自分の考えを深めさせるようにしている。

また、学習内容については、測定値の解釈やグラフの読み取りなど難解な内容が多くなってくるため、下位の生徒にも考察や分析・解釈するためのヒントを与えていきながら、生徒一人一人が考えていけるように配慮したい。

(2) 教材について

電流の学習は小学校理科の全ての学年で取り上げられ、閉回路で電流が流れることや光電池、電気の変換など主に定性的な特徴について学んできている。中学校では回路の性質や電流と電圧の関係など定量的な電流概念を扱っていく。この定性から定量へという移行に際し、いきなり測定実験とデータの解釈という流れで進めてしまうと、多くの生徒がつまずいたり混乱したりしてしまうことが予想される。そこで電流や電圧、抵抗とはどういうものなのかをイメージさせた上で量の変化へ入っていくことが必要と考えた。具体的には、電流は流体もしくは粒子の移動であり、抵抗はその動きを妨げる障害物、電圧は障害物を越えていくのに必要な力といった程度のイメージを持たせることにより、電流の持つ様々な規則性に気付いていくことと思われる。測定して、そのデータから規則性を見出すという流れはいずれ単元後半の電力や熱量にもつながる部分のため、小学校での既習事項の復習とあわせ、生徒のイメージの共有を図りたい。

(3) 指導について

電流の対象は目に見えない電子の動きが対象であるため、その性質や特徴を理解するためにはモデル化するなどして「物質」として捉え、実際の現象を表現したり説明したりしていくことが必要になる。生徒達が考えた様々なモデルを互いに比較・検討していくことにより、よりよいモデルへ作りかえていけば、様々な現象をその共有モデルで説明したり理解したりできるようになると思われる。そのための協同的な学びの場としてグループ学習を大切にしていきたい。

3 単元の指導目標と評価規準

(1) 指導目標

電流回路について観察、実験を通して、電流と電圧との関係及び電流のはたらきについて理解させるとともに、日常生活や社会と関連付けて電流についての初歩的な見方や考え方を養う。

(2) 評価規準

自然現象への 関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然現象についての 知識・理解
電流と電圧との関係及び電流の働きに関する事物・現象に進んでかかわり、それらを科学的に探究しようとするとともに、事象を日常生活のとのかかわりで見ようとする。	電流と電圧との関係及び電流の働きに関する事物、現象の中に問題を見だし、目的意識をもって観察、実験などを行い、事象や結果を分析して解釈し、自らの考えを表現している。	電流と電圧との関係及び電流の働きに関する事物・現象についての観察、実験の基本操作を習得するとともに、観察、実験の計画的な実施、結果の記録や整理など、事象を科学的に探究する技能の基礎を身に付けている。	観察や実験などを通して、電流と電圧との関係及び電流の働きに関する事物・現象についての基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けている。

4 単元の指導計画

電流の性質

15時間

回路にはどんな決まりがあるか	1時間
直列回路・並列回路と回路図	0.5時間
電源装置・電流計・電圧計の使い方	0.5時間
豆電球の明るさと回路	2時間 (本時1/2)
・直列回路・並列回路の豆電球の明るさ	
・抵抗とは何か	
直列回路と並列回路を流れる電流	2時間
直列回路と並列回路に加わる電圧	2時間
電圧と電流の関係	3時間
・オームの法則	
パフォーマンステスト	1時間
ワット数と電流の働き	2時間
電熱線の発熱量を決めるものは何か	1時間

5 本時について

(1) ねらい

回路により豆電球の明るさが異なることを、電流をモデル化しながら説明することができる。

(2) 評価規準

評価規準	努力を要する生徒への支援例
直列回路・並列回路を流れる電流の大きさを、モデルなどを使って考えようとしている。 【評価①】 自然事象への関心・意欲・態度	ビービー弾モデルを想起させ、考えるためのヒントを与える。
回路により明るさが異なることを、理由をつけて説明することができる。 【評価②】 科学的な思考・表現	豆電球を回路の障害物と想定した時、電流が流れにくい道はどんな道かなど、考えるためのヒントを与える。

(3) 授業の構想

前時のうちに直列回路は1本道であり、並列回路は枝分かれ道だという見方を教えておく。豆電球2個と単一乾電池1個を用いた直列回路と並列回路を作り、「豆電球と電池1個の時と比べ、豆電球の明るさはどうなるか」を個人で予想させる。グループで実験を行い、全体で結果を確認した後、「なぜ、明るさが異なるのか」という課題を提示する。ビービー弾モデルをヒントとして与え、ワークシートに課題の理由を個人個人で考え記入する。次に、グループで自分の考え方を発表し合い、それを受けてグループとしての考えをホワイトボードにまとめ、誰が指名されても発表できるようにしておく。グループ毎に発表させ、全グループが発表した後でよりよい説明はどのグループの説明なのか、短時間でグループ討議させる。そして、教師が生徒の考えをまとめながら課題の理由について説明する。

生徒の説明で不十分であった場合、ビービー弾モデルの説明をしてイメージの補足や修正を行う。学習の振り返りとして、豆電球3個を直列、並列につないだ場合、それぞれの明るさはどうか推測させ、本時の学習で学んだ考え方が活用できているかどうか確認する。

個人の直感的な考察をグループで意見を交流することにより、さまざまな気づきが生まれることが期待される。豆電球の明るさを左右する電流の大きさの変化の理由をお互いに説明し合うことでイメージが具体化し、考えが深まるようにしていきたい。

国語科学習指導案

日 時 平成 26 年 10 月 7 日(火) 5 校時

場 所 3 年 A 組教室

学 級 3 年 A 組(男子 16 名 女子 17 名 計 33 名)

授業者 菊池 徹

1 単元名 6 読む[文学 2] 「故郷」魯迅、竹内好・訳 (東京書籍「新しい国語 3」)

2 単元について

(1) 生徒について

生徒たちはこれまでの文学的な文章の学習において、場面の展開をつかみ、人物や情景の描写に着目して作品を読み味わい、評価することに取り組んできた。1 学期の「形」や「風の唄」の学習では、狭い範囲の表現だけを手がかりにするのではなく、他の場面との関連や人間関係の変化を根拠とする姿が多く見られた。そこで、本単元の学習では、さらに作品の時代背景や社会状況にも着眼した読み取りを期待する。

本校では、座席を男女市松模様コの字型に配置し、小グループでの学習をしやすいとしている。生徒たちの学習姿勢は受身的な傾向があり、一斉指導での挙手による発言は少ない。しかし、小グループでの学習の中では上位の生徒が下位の生徒に指示や説明をしたり、相手の考えを聞いたりしながら、ともに課題の解決を図ろうとする姿が見られる。

(2) 学習材について

優れた文学作品には、人間や社会への深い洞察が織り込まれている。文学を読む喜びは、ストーリーを堪能することや、巧みな言語表現を味わうことにとどまらず、人間心理の機微やさまざまな生き方の可能性に気づいたり、社会の構造が人間に与える影響について目を開かされたりする点にもある。これらは、社会に生きる人間として必要な知恵や、考える視点をもたらしてくれるものとして貴重である。

本単元では、「読むこと」の指導内容「(エ) 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。」を指導の重点とするが、「故郷」は、登場人物のものの見方や考え方から、人間や社会について思いを巡らせることに適した学習材である。

(3) 指導について

本単元では、「文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつ」力を身に付けるために、次のような指導をしていく。

一次では、初発の感想を交流し、単元の学習課題を設定する。

二次では、小説の時代背景と場面展開、人間関係の変化、「私」の考える「希望」と「新しい生活」について、自分の考えをもたせる。

三次では、登場人物の生き方や考え方について批評させる。

本単元の学習を通して、生徒自身が、将来の自分について考える契機になるとよい。

3 単元の指導目標と評価規準

(1) 指導目標

- ① 登場人物の生き方や考え方について、自分の考えを深めようとする。

[国語への関心・意欲・態度]

- ② 文章を読んで人間や社会について考え、自分の意見をもつことができる。

[読むこと エ]

- ③ 時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いを理解することができる。

[言語についての知識・理解・技能]

(2) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
小説を読み、登場人物の生き方や考え方を評価して自分の考えを深めようとしている。	小説を読んで文章に表れているものの見方や考え方の違いを整理し、登場人物の生き方や考え方について自分の意見をもっている。(エ)	小説が書かれた時代の言葉の意味や使われ方に着目し、時間の経過による言葉の変化に注意して読んでいる。(イ(ア))

4 指導計画及び評価計画

次	時	主な学習活動	指導上の留意点 ※【 】は評価規準 []は評価方法
一	1	1 全文通読をする。 2 初発の感想を書く。 3 場面設定を確認する。	・あらすじをつかみ、初発の感想を書かせる。 【言】 小説が書かれた時代の言葉の意味や使われ方に着目し、時間の経過による言葉の変化に注意して読んでいる。(イ(ア)) [観察]
		4 感想交流をする。 5 学習課題を設定する。 6 漢字、語句の学習をする。	・疑問点、不明点から課題を設定させる。 【関】 登場人物の生き方や考え方、人間と社会の関わりについて考える学習を見通している。[観察]
二	3	1 「私」が感じた故郷の雰囲気や「私」の心境を読み取る。	・情景描写と帰郷の理由、転居先での節約等から社会状況の変化と寂寥感 ^{せきりょう} を読み取らせる。 【読】 「私」の帰郷の際の心境について、自分の考えをもっている。(エ) [観察・ワークシート]
		2 登場人物の過去と現在の様子を比較する。	・外見や言動の変化と社会状況を考えさせる。 【読】 登場人物の過去と現在の様子を比べて自分の考えをもっている。(エ) [観察・ワークシート]

	5 (本時)	3 「私」とルントーがどんな思いで再会したのかを読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> ・会話、態度、表情等に注目させ、二人の思いと社会状況の変化を考えさせる。 【読】 「私」とルントーの思いのズレを読み取り、二人の関係について自分の考えをもっている。 (エ) [観察・ワークシート]
	6	4 「希望」や「新しい生活」とはどのようなものかを話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・世代による関わりの違いに着目させる。 【読】 「私」の考える「希望」や「新しい生活」について、自分の考えをもっている。 (エ) [観察・ワークシート]
三	7	1 登場人物の生き方や考え方を批評し、交流する。 2 単元の学習をふりかえる。	<ul style="list-style-type: none"> ・二次の学習で書いたワークシートのメモをもとに交流させる。 【読】 小説を読んで批評するために、登場人物の生き方や考え方について自分の意見をもち交流している。(エ) [観察]

5 本時について

(1) 目標

「私」とルントーがそれぞれどんな思いで再会したかに注目し、二人の関係について自分の考えをもつことができる。

(2) 評価規準

評価規準	努力を要する生徒への支援例
幼なじみとして迎えた「私」と、使用人として会いに来たルントーの思いのズレを読み取り、二人の関係について自分の考えをもっている。 【評価】 読む能力(エ)	「私」とルントーが、子どものころに、相手をどう呼んでいたかを確認させ、呼び名から思いを読み取らせる。

(3) 授業の構想

前時で、ルントーが性格まで変わったのは、貧乏になったからではないかと捉えさせておく。

導入で、課題解決の手がかりが、これまでの学習から、会話文や態度、表情等であることを確認する。展開では、まず、個人で二人の思いが分かる部分にラインを引かせ、読み取った思いを書かせる。次に、グループで各自が引いたラインとその部分の思いを交流させる。それを更に全体で確認し、声に出していない思いを想像させることで、心の機微に気づかせる。そして、二人の間の壁の手がかりを探す範囲を再会の場面以外まで広げ、二人の間の格差と、変化したものやその原因についてグループで考えさせる。終末では、今日の学習から思ったこと、考えたことをメモさせ、三次で批評するために自分の思いを書きためていく。

特別活動学習指導案

日 時 平成 26 年 10 月 7 日(火) 5 校時
場 所 体育館
学 級 1 年 B 組 2 年 B 組 3 年 B 組
(男子 52 名 女子 50 名 計 102 名)
授業者 荒木田 慶太 (コーディネーター)
佐々木 愛香 多田 晃子
八重樫 善則 大森 聡子

1 題材名

よりよい(心通い合う)人間関係づくり ―文化祭全校ステージ発表『郷土への思い』―

2 題材について

(1) 生徒について

本校生徒は、授業や日常生活に落ち着きがあり、行事などでは、全校生徒が一体感を大切にして真面目に活動することができる。一方で、自主性や自発性に欠け、固定的な人間関係が形成されていることから、集団の中で自分を表現することが難しい場合がある。

そこで、本校では、心通い合う人間関係作りや表現力の向上を目的として、2年前から学級のグループを基本とした縦割り集団を組織し、異学年の交流活動に取り組んできた。特別活動では、主に座談会と称する「話し合い活動」を行ってきたが、初年度は、3年生ばかり発言し、異学年間の交流が十分とは言えなかったため、司会者との打ち合わせや、事前に自分の考えを学習シートにまとめ発表させるなどの工夫をしたことによって、深まりのある話し合いとなってきた。

また、8月に本校生徒を対象に実施した学習アンケートの回答結果を見ると、「よい雰囲気です」という質問に対して、肯定的な意見が79%となっていることから、先輩と後輩のよりよい関係が築かれ、学校全体の雰囲気が温かいものになってきていると感じている。

(2) 教材について

本題材は、文化祭全校ステージ発表に関わる学習活動として取り扱っているため、学級活動・生徒会活動・学校行事を横断する題材として構成している。

また、東日本大震災を経て、過去3年間、文化祭全校ステージ発表で復興をテーマに取り上げ、被災地の復興にとどまらず、他者と自分自身の生き方を考え、これからどのように復興に関わっていくべきかを検討し発表してきた。今回、題材のテーマを「郷土への思い」としたのは、郷土への愛がなければ、ふるさとの岩手・東北の復興に携わっていくことは難しいのではないかと考えたからである。

本校は、3年後に統合を控えており、生徒自らが郷土とは何かを考え、郷土観を高めていくことは有用な学習の機会になると思われる。郷土を知り、郷土を愛する心を持ち、小山人としての誇りを持ち生きていくことの大切さを学ばせる教材として扱っていきたい。

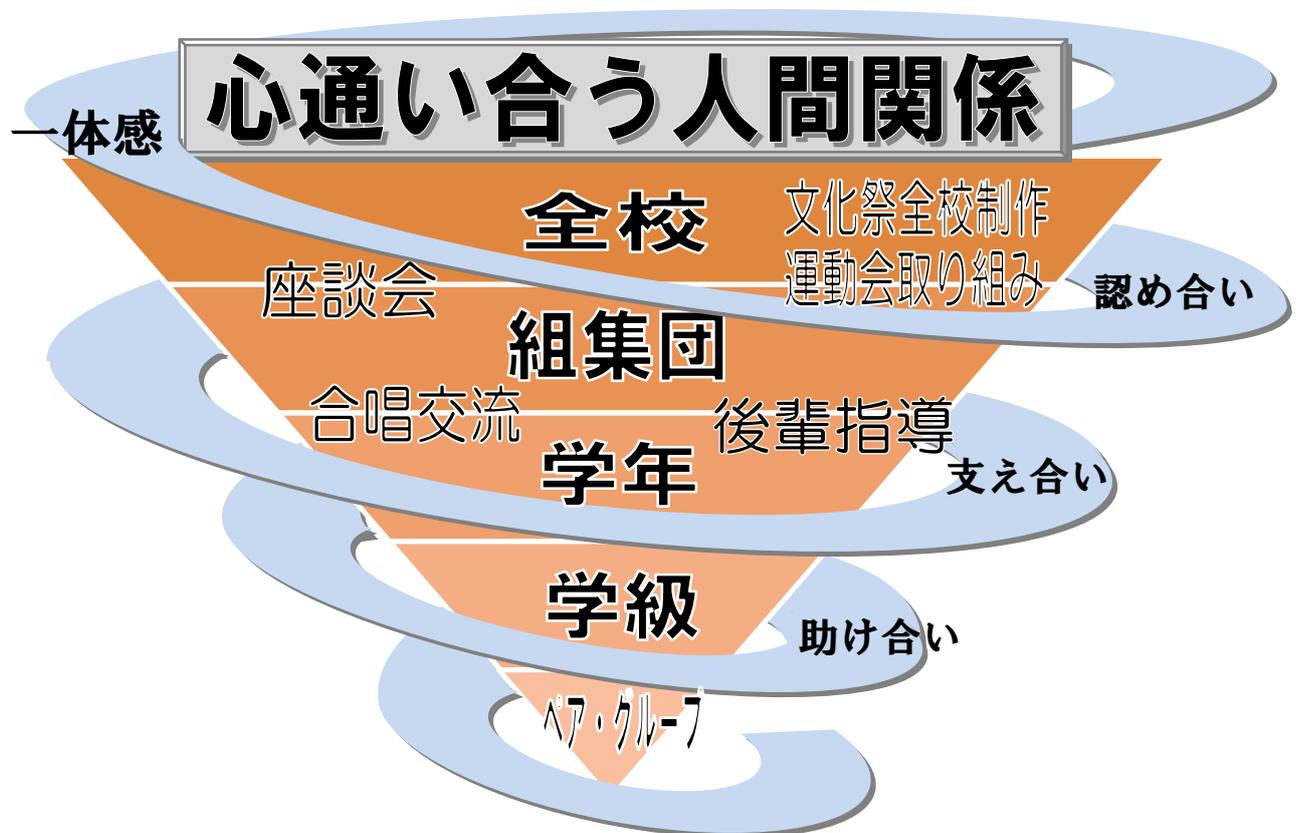
(3) 指導について

生徒は、郷土に関してのイメージを「田舎」「自然が豊か」程度にしか捉えておらず、郷土に対する思いもあまり強いものではない。これは、郷土を離れたことがないなど経験不足によるものであろう。この点を補うためにも、様々な人との交流を通じて、多種多様な郷土観に触れさせ、生徒一人一人が、自分なりの郷土観を構築できるようにしていきたい。そのために、学習を通じて、郷土観がどのように変容していくのかを、毎回の記録の見取りにより評価していくことが重要となる。その上で、必要に応じて、座談会での支援や感想記入の際の個別指導など加えていく。

また、全校ステージ発表脚本作成のために、最終的には、小山中としての郷土観をまとめることになるが、生徒それぞれの郷土観を大切にしたい発表となるよう配慮していく。

昨年度までは、異学年の交流活動の構成メンバーを固定せずに学習に取り組んできたが、今年度は、話し合いや活動の質を重視するため、年間を通して、同一メンバーで活動を進めている。異学年で構成されたメンバーの関わりがどのように深まり、課題解決を進めているのかも評価のポイントであり、生徒一人一人の変容と成長に注目していきたい。異学年の交流活動を進めていくうえで、教師間の連携と適切な指導が必要となることから、関わり合い研究会などを通じて共通理解を図り指導にあたっている。

【心通い合う人間関係作りのイメージ】



3 題材の指導目標と評価規準

(1) 指導目標

- ① 生徒一人一人の郷土観の形成と、郷土愛の深化を通して、岩手・東北の復興と郷土の発展を支えようとする態度を育む。
- ② 先輩・後輩のよりよい関係を築き、助け合い・支え合い・認め合いを大切にした、文化祭活動に取り組み、小山中全体の一体感を深めていく。

(2) 評価規準

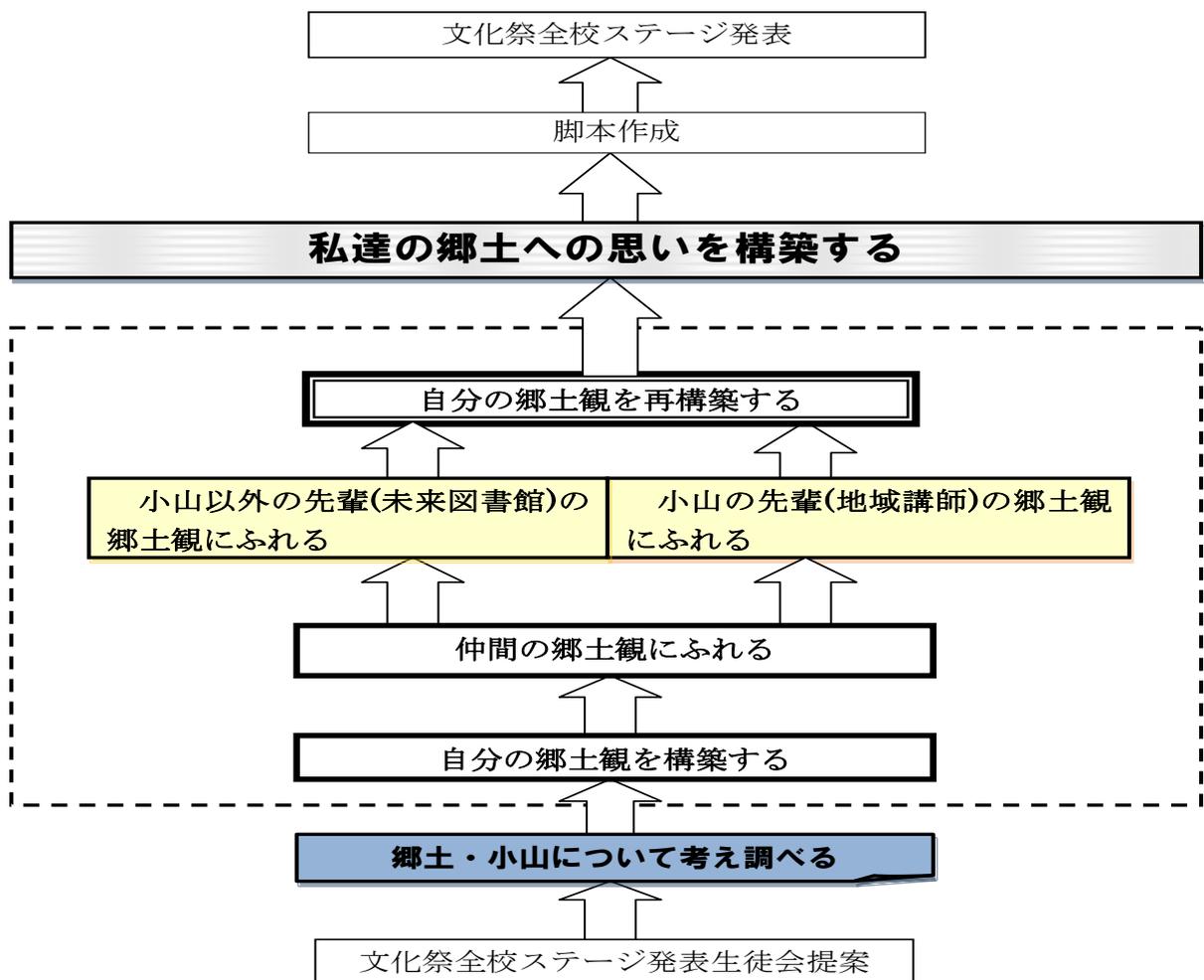
集団活動や郷土についての 関心・意欲・態度	集団や地域の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や郷土についての 知識・理解
郷土に対する関心を高め、文化祭へ向けた活動や郷土に関する学習活動に意欲的・主体的に取り組もうとしている。	郷土を愛し、自分なりの郷土観を形成するために、他の考えにふれ、自分の考えを確かなものにしようとしている。	郷土愛と復興の関わり、文化祭を成功させることの意義、異学年の交流活動を行う意義について理解している。

4 指導計画及び評価計画(※第1～3回の座談会は別の題材で実施した)

	教育課程 時数	学習活動及び学習内容	指導上の留意点	特別活動の評価方法
7月25日 (金)	行事 1時間	生徒集会 文化祭全校ステージ発表テーマの説明	文化祭実行委員会から説明を行い、これまでの経過についてもふれさせる。	
夏休み		個人調べ学習 『「郷土・小山」について考え調べよう』 ・郷土イメージマップづくり ・個人テーマ調べ学習	内容の薄い調べ学習とならないように、書き方や調べ方などについて指導する。	
8月27日 (火)	総合 1時間	第4回座談会 『「郷土」について考える会①』 ・個人調べ学習の発表と交流	単なる発表会とならないようにし、それをもとに郷土とは何か、簡単な交流を行わせる。	
9月2日 (火)	総合 2時間	ワークショップ(協力:未来図書館) 『「郷土」について考える会②』 ・先輩の郷土観について学ぶ	教師と先輩(未来図書館)との事前打ち合わせを行い、学習のねらい、生徒に学ばせたいことなどを確認する。	
9月9日 (火)	特活 1時間	第5回座談会 『「郷土」について考える会③』 ・自分の郷土観を確かなものにしていく	先輩の郷土観をもとに意見交流を行わせ、自分の郷土観をより確かなものにさせていく。	観察・学習シート マイポートフォリオシート
10月2日 (木)	総合 2時間	ワークショップ(協力:地域講師) 『「郷土」について考える会④』 ・地域講師の郷土観について学ぶ	教師と地域講師との事前打ち合わせを行い、学習のねらい、生徒に学ばせたいことなどを確認する。	
10月7日 (火) 本時	特活 1時間	第6回座談会 『「郷土」について考える会⑤』 ・自分の郷土観を確かなものにしていく	地域講師の郷土観をもとに意見交流を行わせ、自分の郷土観をより確かなものにさせていく。	観察・学習シート マイポートフォリオシート
10月9日 (木)	総合 1時間	作文作成 『自分の郷土観をまとめよう』	マイポートフォリオシートを振り返りながら、まとめの作文を作成させる。	

10月10日 (金)	特活 1時間	第7回座談会 『「郷土」について考える会⑥』 ・全校ステージ発表における「私達の郷土への思い」について検討する	個人の郷土観をもとに、私達の郷土への思いについて考えさせる。 郷土と復興との関わりについてふれる。	観察・学習シート マイポートフォリオシート
10月11日 (土)以降		全校ステージ発表シナリオ作成 全校ステージ発表練習	言葉の意味や、シナリオの流れを考えさせながら練習に取り組ませる。	
10月23日 (木)	行事 4時間	恵翠祭りリハーサル	本番の会場で全校ステージ発表の練習。声の大きさや動作の確認と立ち位置や隊形などの確認し、本番を見据えて練習させる。	
10月26日 (日)	行事 6時間	文化祭(恵翠祭)	小山中生の郷土愛と一体感を表現させる。	
10月30日 (木)	特活 2時間	第8回座談会 『これまでの活動をふりかえろう』 ・感想と学んだことを交流する 作文作成 ・活動を通してのまとめを行う。	これまでの活動を振り返り、郷土と復興の関わりについてまとめさせる。	観察・作文

※ 本題材の系統図



5 本時について

(1) ねらい

- ① 前時の学習の振り返りや他の意見を参考にし、自分の郷土観をより確かなものにしていく。
- ② グループ・全体での関わり合いを通じて生徒間のよりよい関係を築き、文化祭に向けて意欲的に活動する態度を育む。

(2) 評価規準

集団活動や郷土についての 関心・意欲・態度	集団や地域の一員としての 思考・判断・実践
自分の郷土観を確かなものにするために、座談会に意欲的に取り組もうとしている。 【評価①】	様々な郷土観に触れると共に、他の考えを聞き、自分の郷土観を確かなものにしてしようとしている。 【評価②】

(3) 授業の構想

前時に行った「郷土について考える会④」を通じて、生徒の郷土観は大きく変容し、地元の前輩方からよい影響を受けたことが学習シートからうかがえる。そこで本時ではその先輩方の郷土観をグループ・全体で共有し、自己の郷土観をより確かなものにさせたい。

導入では前時に行った「郷土について考える会④」のことを想起させながら、教師から本時のねらいと流れを確認する。

展開では、事前に作成したフリップ(先輩の郷土観と根拠)をもとに、グループ座談会で交流を行う。グループ座談会では、「先輩の郷土観」について交流し、他者と自分の考えの共通点や相違点に着目し、擦り合わせながら、グループで先輩の郷土観を構築している視点のキーワードを見出す。全体座談会では、各グループで話し合われた先輩の郷土観のキーワードをスクリーンに映し、気づいたことや疑問に思うことなどについて交流をする。交流の中で、個々の郷土観も交えて発表させたい。

終末では、コーディネーターから座談会の振り返りを行う。

本時において、司会者や3年生リーダーが重要な役割を担うことになる。そこで、事前の指導をしっかりと行い、座談会に臨ませ、授業者は基本的にグループの様子を観察し、状況に応じて声掛けを行う。

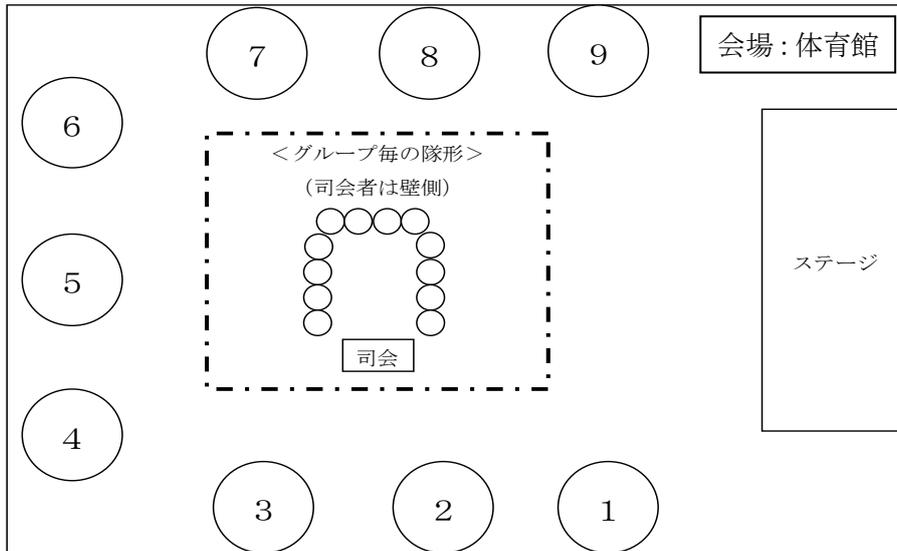
本時におけるグループ活動のねらいは「他者と自分の考えを擦り合わせ、先輩の郷土観の真意に迫らせる」、「一人一人の発表の場を保障し、課題に対する主体的な関わりを持たせる」であるとした。また、生徒がグループや全体で郷土観について真剣に意見交流をする中で、文化祭に向けての活動意欲を高めさせたい。

(4) 本時の展開

段階	学習内容と活動	指導上の留意点 ※ [] は評価方法
導入 (5分)	1 開会の言葉 2 本時のねらいと流れの確認	1 前時を想起させる内容を生徒に考えさせ、述べさせる。 2 教師が本時のねらいと流れを説明する。 《ねらい》自分の郷土観をより確かなものにしよう。
展開 (40分)	3 グループ座談会 先輩(地域講師)は、郷土についてどのように考えていたか交流する。(小グループ活動) (隊形移動) 4 全体座談会 郷土観一覧を見て、気付いたことと自分の郷土観を発表し交流する。	3 前時の「郷土について考える会④」をもとに、事前に先輩の郷土観とその根拠をフリップにまとめ、本時に臨ませる。 【評価①】 [観察] ・グループで、フリップをもとに先輩の郷土観についてのキーワードを検討させる。 小グループ活動のねらい ・他者と自分の考えを擦り合わせ、先輩の郷土観の真意に迫らせる。 ・一人一人の発表の場を保障し、課題に対する主体的な関わりを持たせる。 ・事前に司会者と3年生リーダーの打ち合わせを行い、<話し合いのポイント>などを確認しておく。 <話し合いのポイント> ① 司会者や3年生リーダーが流れをよく理解していること。 ② 自然な雰囲気の中で話し合いが行われること。 ③ 共通点や相違点に着目し、しっかりと話を聞くようにしていくこと。 ・授業者は基本的に座談会の様子を観察し、状況に応じて、生徒への声掛けを行う。 ・先輩の郷土観を3年生リーダーが全体司会者に報告し、授業者が郷土観一覧を作成する。その間に生徒は全体会隊形に並び替える。 4 スクリーンに映し出された郷土観一覧を見て、様々な郷土観があることやその郷土観を持った根拠など、郷土を見る様々な視点を取り上げ交流させる。 【評価①②】 [観察]
終末 (5分)	5 コーディネーターから本時の振り返りを行う。 6 閉会の言葉	5 コーディネーターが、座談会の様子や今後の予定についてふれる。 6 全体司会者から本時の感想と自分の郷土観を述べさせる。

座談会の配置図

○グループ座談会の隊形

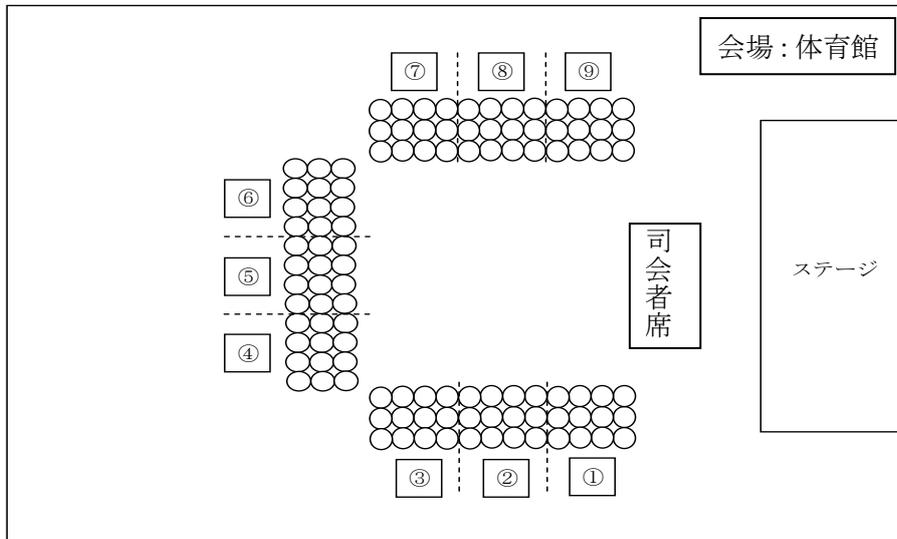


①～⑨がそれぞれのグループを表す。

【配置の工夫】

- ・グループ毎の隊形もコの字としている。
- ・グループの司会者以外の生徒たちが、他のグループの様子が気にならないように、壁側を向くような配置とした。
- ・生徒間の距離を縮め、交流させるためにイスは置かない。

○全体座談会の隊形



※○の一つ一つが生徒

【配置の工夫】

- ・3年生が先頭になり、積極的に意見発表を行う姿が1、2年生によく見えるようにしている。
- ・一人一人にイスを配置する。

○その他

- ・学級や学年集会、生徒総会でもコの字隊形としており、全体会でも発表の際に互いの顔を見ながら行うことができるようにした。